高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.36

▲岡本一平画「漱石先生」東北大学附属図書館蔵

リレー随筆

ある日の漱石山房

―寺田寅彦、大塚楠緒子に触れて―

石﨑　等

漱石は相手に対して率直に物言いをする人間であった。

私たちは、自分が接している社会や人間関係から生じた鬱屈や不満をかかえこんで生きているわけだが、そういうときに出会った人の中には、自分のぎこちない言動を理解して寛容な態度で接してくれ、救われた思いをすることがある。漱石はそういうデリカシーのある人物を大切にした。寺田寅彦と大塚楠緒子は、漱石が理想とするそうした人間関係を維持することのできた珍しい人物のように思われる。

漱石全集をひもとくと、寅彦と楠緒子宛の手紙は、おのおの五三通と六通が収められている。楠緒子の場合、小説の指導を受け、漱石との親しい関係が芽ばえるのがおそく、しかも明治四三年十一月に亡くなっているから、少ないのは当然である。寅彦の場合は、同じ門下生の中でもやや少ない気がする。しかし、人間関係は手紙の多寡ではかることはできない。親愛と敬意にみちた濃密な師弟関係を結んだ第一等の人物は寅彦であることは疑いえない。それは大正五年の日記の最後「歳晩所感　夏目先生を失ふた事は自分の生涯にとつて大きな出来事である。」ということばに籠められている。

楠緒子にとって、漱石の存在は、師弟関係以上のものがあったようだ。それを私は、漱石への畏敬と慈愛ではなかったかと考えている。

明治四三年一月十九日、漱石は、ベルリンの客舎にいた寅彦に、漱石山房で開かれた新年会やら文壇状況やら、近況を知らせる手紙を書き送った。

……女連には大塚の奥さんや物集の御嬢さん姉妹が来た。(……)「それから」が出来たから一部此手紙と同便で送る。もう少しすると又小説を書き出さなければならない。又いそがしくなる。君がゐなくなつたので理科大学の穴倉生活抔が書けなくなつた。

この手紙が、二組の師弟関係をめぐるほとんど唯一の接点である。と同時に、漱石研究にとっても楠緒子研究にとっても、重要なことが語られている。

それまで楠緒子は、漱石山房に出入することも、多くの門下生と接触することもなかったであろう。この新年会は、漱石との関係を一層深め、彼女にとって文学上の転機となる日だったように思われる。残念ながら、その急逝によって実現されなかったけれど……。

（元立教大学教授）

展覧会紹介 Exhibition

「夏目漱石―漱石山房の日々」展

平成19年
4月8日(日)
▼
5月20日(日)
企画展示室
観覧料550円

明治の文豪、夏目漱石がその精魂をこめて作り上げた作品の多くは、四十歳から晩年まで過ごした早稲田南町(現・新宿区)にあった自宅の書斎〈漱石山房〉から生み出されました。本展覧会では、この〈漱石山房〉を中心に漱石の魅力に迫ります。

◀漱石山房の書斎で (写真提供/神奈川県立神奈川近代文学館)

漱石山房の日々

第1部は〈漱石山房〉の夏目漱石と題し、残された写真や遺品、この書斎から生み出された作品を紹介します。

〈漱石山房〉で紫檀の文机に肘をつく漱石の肖像写真、シンボルツリーとも言える芭蕉の植えられた庭の写真、同じ書斎を自ら描いた絵画からは、漱石が創作に没頭した空間の様子が伝わってきます。また、晩年、筆が進まないときに撫で回していたという竹腕枕や愛用の万年筆、書道道具、書画の落款に使われた印など、数多くの遺品からは洒落っ気のあるこだわりが感じられ、漱石の人となりに触れていただけます。

漱石は〈漱石山房〉に転居する前、専属の作家として朝日新聞社に入社、入社後の第一作として「虞美人草」を連載します。漱石に朝日新聞入社を決心させたのが、当時主筆をつとめていた池辺三山でした。三山あての書簡では彼に対する信頼の厚さをうかがい知ることができます。

転居後の漱石は、「三四郎」「それから」「門」と、次々と作品を発表していきます。しかし、もともと持病として胃潰瘍を患っていた漱石は、転地療養のために訪れた修善寺で大量に吐血し、危篤状態となります。いわゆる「修善寺の大患」です。九死に一生を得た心境を託した漢詩稿や入院中の病床から妻に送った手紙などからは、当時の漱石の心情を推し量ることができます。翌年、幼い我が子が急死、漱石の死生観の深まりは作品へと反映されていきました。

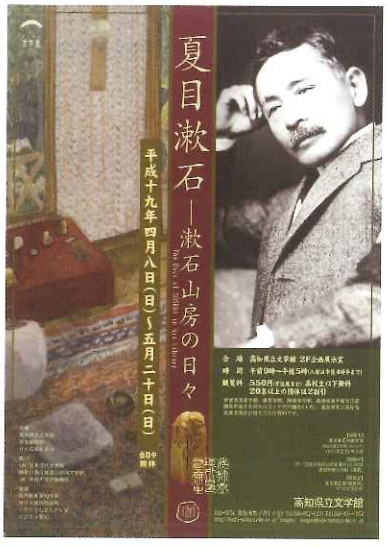
木曜会と書画の世界

さて、訪問者への対応で作家としての本業に支障が出るようになっていた漱石は、毎週木曜午後三時からを面会日と定めました。野間真綱あてのはがきにそのことが書かれていますが、これが「木曜会」の始まりです。

〈漱石山房〉に転居後も「木曜会」には小宮豊隆、森田草平、安倍能成、阿部次郎、野上豊一郎・弥生子、内田百閒、後年に門下となった久米正雄、芥川龍之介、装幀を手がけた橋口五葉、津田青楓らが集いました。漱石が彼らに送った手紙には彼らの作品へのアドバイスや激励が書かれ、文学に対する真摯さと人としての温かみや率直さが伝わってきます。漱石のこのような部分が、多くの門人を惹きつけた魅力だったのではないでしょうか。

また、漱石は〈漱石山房〉で多くの書画も生み出しました。水彩画、水墨画、山水画などの絵画や、わざわざ揮毫を頼む人がいたほどの腕前であった書も展示いたします。文豪というだけではない漱石の一面をお楽しみください。

◀書「夜静庭寒」(写真提供/神奈川県立神奈川近代文学館)



展覧会紹介 Exhibition

「夏目漱石 ―漱石山房の日々」展

平成19年
4月8日(日)
▼
5月20日(日)
企画展示室
観覧料550円

漱石の半生

第2部は 自伝的小説「道草」―半生をふりかえる と題し、〈漱石山房〉にたどり着くまでの漱石を紹介いたします。漱石は幼くして養子となり、その後夏目家に戻りました。しかし、養父との関係は後に漱石を苦しめることとなり、そのいきさつが自伝的小説「道草」となりました。

第一高等中学校予科で正岡子規（まさおかしき）と出会い、子規から俳句の指導を受けるなど漱石は強い影響を受けました。子規も漱石の文才を認め、お互いに触発し高め合う関係となりました。

▲『彼岸過迄』
（写真提供／日本近代文学館）

帝国大学に進学し英文学を修めた漱石は英文学教師として松山、熊本に赴任しました。この頃から神経衰弱に悩んでいた漱石でしたが、その後のイギリス留学により症状が悪化してしまいます。帰国後の漱石を心配した高浜虚子（たかはまきょし）が写生文を書くようにすすめたことにより、「吾輩は猫である」が生み出されました。これが文豪・漱石の始まりであり、〈漱石山房〉の日々へと続くのです。

漱石の死後約九十年が過ぎました。しかし、漱石の魅力は時代を超えて、現代を生きる私たちに語りかけてきます。その魅力を生み出す舞台となった〈漱石山房〉の世界に、ぜひ、お越しください。

※漱石門下の最初期からの人物が、高知県出身の寺田寅彦（てらだとらひこ）です。漱石と寅彦の間には師弟を超えた親しい関係がありました。第3部として、当館所蔵資料でご紹介いたします。

（学芸課 ／間城彩佳）

■漱石と寅彦■

▲寅彦宛漱石自筆水彩絵はがき

寺田寅彦は、高知の第一中学校を経て熊本の第五高等学校に進みます。同郷の友人が英語の試験を「しくじったらしい」ということで、試験の点を交渉する委員として英語講師の漱石の家を訪ねたことが二人の交流のきっかけとなりました。

その時寅彦は、当時すでに俳人として知られていた漱石に俳句について尋ねたそうです。漱石は「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである」等々と返答。

やがて寅彦は他の五高生らと漱石に俳句を習うようになります。漱石の添削を受けた寅彦の俳句は「ホトトギス」や「日本新聞」に投稿され、掲載されています。

ここから正岡子規や高浜虚子との交流も始まり、漱石の影響により深まった文学への傾倒は、やがて随筆家・吉村冬彦（寅彦筆名）の誕生をみることとなります。

寅彦は「夏目漱石先生の追憶」の中で「先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わったというだけではなくて、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わった。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた。」と記しています。漱石は寅彦の「真なるもの」を見抜き、どの分野に進んでも一流の仕事をするであろうと高く評価していたと伝えられています。

当館には漱石の寅彦宛書簡が数十通収蔵されています。それらの文面からは、師弟というよりは、どちらかというと年の離れた友人といった間柄が感じられ、二人の終生変わらぬ親交の深さを窺い知る貴重な資料となっています。

（学芸課 ／川島郁子）

▲寅彦宛漱石自筆水彩絵はがき

倉橋展関連企画レポート

「倉橋由美子さんを語る」会を終えて

「倉橋由美子さんを語る」は、二月十八日(日)午後二時から、高知県立文学館一階ホールで行われました。百名近いお客様を迎え、最初に倉橋さんの小学校時代の同級生であり、現在、日本フルート協会常任理事、フルート奏者として活躍中の甲藤卓雄さんによるドヴィッシー作曲「シリンクス」のソロ演奏と弟の三郎さんの友人であるヴァイオリニストの宮内康恵さんによるバッハ作曲の「ルーレ」が演奏されました。その後、フルートとヴァイオリンによるモーツアルトの「コンツェルト」が演奏され、参加者は、その美しいハーモニーに魅了され、穏やかな優しいひとときを過ごしました。

その後、弟の倉橋三郎さんによる「姉とぼく」と題しての記念講演会が行われ、姉弟ならではの話に会場は始終笑いに包まれていました。

続いて、由美子さんの土佐高校時代の友人の建築家 山本長水さんが設計した、神奈川県伊勢原市の倉橋さん宅を山本さんが訪ねた際のビデオが上映されました。はにかみながら旧友を出迎える倉橋さんからは、一貫して厳しい目線でものの本質を見通すような作品群を執筆する姿を想像することはできません。自然が好きで、お料理が上手という良き主婦の一面を見させていただきました。会場に来られていた山本さんからコメントをいただき、当時の思い出話に花が咲いていました。

また、三郎さんを囲んで、山田小学校時代の友人の皆様による旅行の話やお四国(遍路)に行った話、次女のさやかさんが設計した伊豆の家を訪問した時の事など、笑いあり、涙あり、感動の2時間でした。最後は、由美子さんもよく口ずさんだという「庚申堂の秋」を甲藤さんと宮内さんの伴奏でコーラスし、閉会となりました。会を終えて、感無量といった感じの三郎さんの表情がとても印象的でした。

「倉橋由美子さんを語る」会を盛り上げてくださった、司会の金沢典子さん、出演者の皆様、参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

(学芸課 ／津田加須子)

館長室から

10年目の文学館

前田 英博

高知県立文学館は、平成9年11月2日に開館したので、今年は開館10年目となる。この10年を振り返りながら、文学館の有り様について考えてみた。

文学館は、県の設置した「公の施設」であり、設置及び管理については条例で定められている。その設置目的としては、「文学その他芸術文化に関する県民の知識及び教養の向上を図り、県民文化の振興に寄与する」とされている。文学その他芸術文化は、人が豊かな心を育むためには不可欠のものであり、心豊かな県民を育てるためには、文学館が必要であることから設置されたものである。

しかしながら、設置された当時と現在では、文学館を取り巻く環境は随分と変わってきた。この10年間で地方財政は随分と厳しくなってきたため、これまで「公の施設」は、公的機関にしか管理運営を委託することが出来なかったが、それを民間企業にも委託することが出来るよう地方自治法が改正された。これが指定管理者制度である。

地方財政が厳しくなってきた今、行政を執行する時、如何に経費を節減するかを真剣に考えていかねばならないことは当然であり、文学館も聖域ではなく、平成18年度から指定管理者制が導入された。しかしながら、その設置目的やこれまで文学館を信頼して大切な資料を寄贈・寄託してくださった方々の気持ちを考えた場合、コスト削減を目的とし、公募によって指定管理者を決定すると言う考えがあれば賛成し難い思いである。文学館の業務は、文学資料や文学者の遺品等の収集、保管、展示等であり、積み重ねられた経験と、その経験により資料所有者等から受ける信頼がなければ成り立たないものである。目前の必要性は十分に理解はしつつ、文学館の有り様について今一度考える時期が来ていると思う。

土佐文学さんぽ 34

田中貢太郎のかけだし時代 ―吉野川沿い川口集落―

猪野 睦

大杉からトンネルをぬけ、吉野川に沿う県道を下ると、吉野川に立川川が流れこんでくる川口集落がある。そこを通り立川御殿のそばをへて、よくウドとりに行ったが、まだ高知自動車道のできていない時代だった。

川口は川の合流するところで雑貨を商なう店屋などもあった。そこを通るたび、ここが田中貢太郎が小学校教師として、二年ばかりいて、小説をかいたところだったのかと、ひそかな感慨にとらわれた。明治三八(一九〇五)年から四十(一九〇七)年にかけて、ここで「土陽新聞」に「未亡人」「村長」などの小説をかき、そのあと大町桂月をたよって上京した。川口はいわばかけだし作家の修業の場であった。

田中貢太郎は大正八(一九一九)年になって、この川口教師時代を回想して「吉野川の渓間」をかいた。学校は川口から半キロばかりの急傾斜の山道を登ったところにあった。眼下に吉野川の流れが見えた。先日尋ねた学校は時計台のあるしゃれた校舎に変っていたが、昨年廃校となり、民宿になっていた。校庭には往時を思わす大きな桜の古木が三本残っていた。

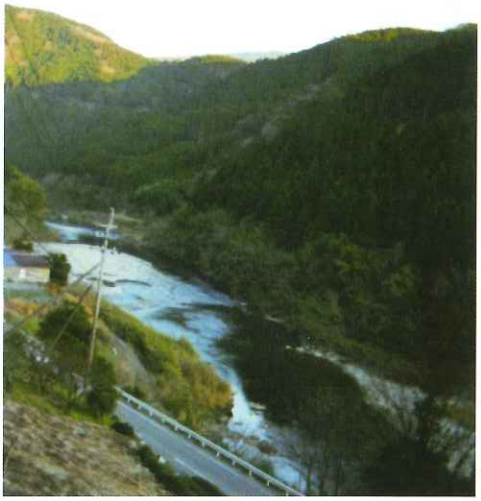
そこを田中貢太郎は人家の上になった傾斜地の激しい山の腰にあった。吉野川の流れが直ぐ眼の下にあり、渡船場があって、川の中に大綱を張って、それに船から出した環をとおし、綱をたぐって往来していた。米、塩、石油、反物、煙草など生活に必要なものは全部この渡船に頼っていた。水出があると孤島になったと書いていた。

学校は校長と二人だったが、昼飯時に校長と酒を飲み始め生徒を忘れたこともあり、正月、天長節、證書授与式には父兄と学校で地酒を飲んだ。冬には軒に青龍刀のような長い氷柱が垂れるともあった。村の習俗、ミツマタ栽培、密造酒つくりなども書きこんだこの「吉野川の渓間」は明治後半の山村の暮しの記録でもあった。

上京後の田中貢太郎は、幸徳秋水、田岡嶺雲、奥宮健之のところへ出入し、自由民権運動の側面を取材、田岡嶺雲の「明治叛臣伝」の代筆、のちに「貢太郎見聞録」、昭和期になって板垣退助、中江兆民、山内容堂らを登場させる大河小説「旋風時代」をかきあげた。怪談ものを含め多くの作品を残し、井伏鱒二、田岡典夫らも育てた。

「吉野川の渓間」には土佐へ帰ったとき、そこへ行くことができず残念であったと書くが、かけだし時代にこもった川口への深い郷愁もあったろう。

(詩人)



◀眼下を流れる吉野川

文学館で紹介している約40名の文学者を毎回2名取り上げ、展示資料のエピソードも交えご紹介します。下の実線部分を切り取って別に綴じてみてください。5年後には「常設展作家ミニ事典」となります。

常設展虫めがね 7

田岡嶺雲(たおかれいうん)(一八七〇～一九一二)

予の運命を数奇ならしめた郷土の影響が今一つある。それは土佐人に有通な反抗的気質である。

文学館の常設展に、裁断の跡が残る本『壺中観』が展示されています。文芸評論家・ジャーナリスト・思想家・中国文学者としても活躍した田岡嶺雲の評論集ですが、その鋭い社会評論ゆえに、時の政府から「安寧秩序ヲ妨害スルモノ」として発禁処分にあいました。

多感な少年時代を自由民権運動の昂揚期に過ごし、板垣退助の演説を聞き、坂崎紫瀾や宮崎夢柳らの新聞小説を愛読、植木枝盛の格調高い民権論に触れるなど、土佐のいごっそう精神を体いっぱいに吸収した嶺雲は、青雲の志を抱いて上京、水産伝習所時代の師・内村鑑三の「偽君子となるな」の教えを生涯肝に銘じ、「但つねに正義と、真理と、自由とのために奮励する」(自伝文学『数奇伝』より)稀代の文学者となります。

社会を冷静に、的確に見抜く眼を持ち、樋口一葉・泉鏡花の才能をいち早く認め、一九〇五(明治三八)年に創刊した雑誌《天鼓》では「吾輩は猫である」を書き始めていた夏目漱石と木下尚江を「二人者共に其作物未だ多からずと雖ども、想ふに其當さに来るべき文壇の新傾向を指導する先達」(《天鼓》明治38年5月号より)と高く評価します。

また、「万朝報」の記者時代に出会った幸徳秋水とも親交を深めました。文学館の常設展には、一九一〇(明治四三)年六月一日、大逆事件での秋水捕縛に立ち会い、また自らも尋問を受けた後に家族に向けて出された書簡も展示されています。

▲裁断の跡がのこる『壺中観』

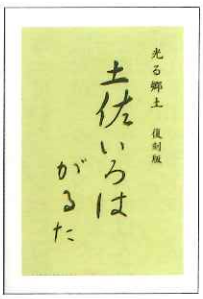
※「土佐の反骨 田岡嶺雲」企画展図録 好評販売中!(平成12年10月21日～12月3日開催の田岡嶺雲展にて作成されました。税込1,000円)

資料受贈報告

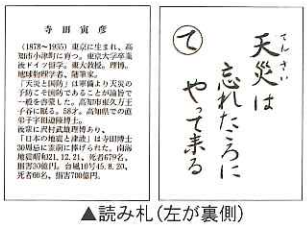
―最近の寄贈資料から―

『光る郷土 復刻版 土佐いろはがるた』

恒石直和 文
浜田正貴 絵
川竹 妙 字



▲取り札



▲読み札(左が裏側)

この「土佐いろはがるた」は恒石直和先生の考案・製作によるもので恒石先生が吾川郡池川小学校に在職されていた昭和四八年に発行されました。このたび発行されたのはこれの復刻版で、原版よりひとまわり大きくなっています。取り札の絵は浜田正貴先生(当時 高岡郡久礼小学校)、読み札の字は川竹 妙先生 (当時 高知市潮江小学校)が担当しています。

この「かるた」は高知の自然や歴史、産業・文化・芸術など先人によって築き上げられ受け継がれてきた様々な事柄の中から代表的なものを五十選び、これを「かるた」の形に編集したもので、読み札と取り札を合わせて百枚あります。読み札の裏面には「かるた」のテーマに関わる解説があるのが特色です。この解説は、社会科教育、理科教育に造詣の深い恒石先生が資料に基づいて書かれたもので、要点が一五〇字～二〇〇字程度にまとめられた簡潔な郷土百科ともいえる内容になっています。復刻にあたって少し加筆されています。

遊び方はいわゆる「かるた」方式で、読み札表面の「青い月夜の浜辺には親を探してなく鳥が」を読めば、「歌の雰囲気を漂わせた海辺の情景を描いた〈あ〉の取り札」を取ることになります。読み札の「天災は忘れたころにやって来る」を読めば「大津波による災害を描いた〈て〉の取り札」を取ります。また、読み札の裏側にはそれぞれ弘田龍太郎、寺田寅彦の略歴がまとめられているといった具合になっています。

初版当時の高知の姿を彷彿させるとともに、今の時代にも生き生きとした内容で遊びながら郷土を学ぶことが出来ます。

受贈報告(平成十八年十二月～十九年二月) 敬称略

▼**恒石直和**・「(光る郷土 復刻版)土佐いろはがるた 恒石直和 文・浜田正貴 絵・川竹妙 字 恒石直和」▼**叶岡哲**・**叶岡淑子**・「希望を語って闘って―叶岡哲さんの歩いた道― 叶岡哲さんの足跡を記録する会編 飛鳥出版社」▼**坂本稔**・「ウィーン遠からじ―高橋家往復書簡集― 高橋悦子編 南方手帖」▼**壺発行所**・「芭蕉の風Ⅵ 杉本恒星著 壺発行所」他▼**市川敦子**・「(歌集)鶯の雛 市川敦子著 短歌新聞社」▼**植田馨**・「(歌集)海想譜 植田馨著 短歌新聞社」他▼**清岡恵子**・「ひさしぶりのバッハ 清岡卓行著 思潮社」▼**安部幸吉**・「土佐流刑 流され人考 安部幸吉著 牧歌社」▼**山崎霖太郎**・「国分川 山崎霖太郎著刊」▼**市原麟一郎**・「(子どもに語る戦争たいけん物語第3集)いのち燃えたつ山 市原麟一郎著 リーブル出版」▼**甲藤卓雄**・「山崎百合子のこと 甲藤卓雄著 喜怒哀楽書房」▼**永野美智子**・「零余子 第三集 永野美智子編 零余子の会」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

常設展虫めがね 8

予は土佐に生まれたる一個の社会主義者也

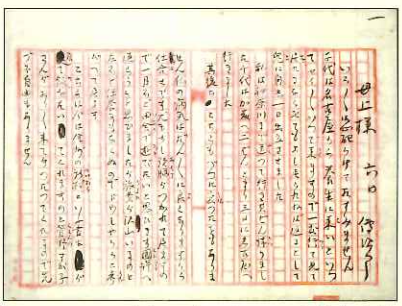
幸徳秋水(こうとくしゅうすい)(一八七一～一九一一)

明治の時代を震撼させた、いわゆる大逆事件。この事件は首謀者の名をとって幸徳事件とも呼ばれています。この事件の首謀者であるとされたのが、高知出身の幸徳秋水でした。

秋水は、同じ高知出身で自由民権家として名高い中江兆民を師と仰ぎ、兆民の民権思想を受け継ぎ、それを発展させ、社会主義思想、反戦思想の先駆者として活躍した思想家でした。

秋水は、一八八八(明治二一)年、十八歳のときに兆民の学僕となり、兆民宅へ寄寓していた時に兆民の日常の言行を記し(『兆民先生行状記』)、兆民の死後、『兆民先生』を刊行しました。この『兆民先生』は弟子である秋水が兆民について書いた伝記ですが、この中で文士としての兆民のことを「先生の一たび椽大の筆を揮いて風雲を叱咤するの処、殆ど匹夫にして百世の師となり一言にして天下の法となるの慨有り、文士としての先生は、真に明治の当代の第一人なりき。」と書いています。

社会主義運動、反戦運動家として明治の時代を激しく生き、大逆罪で処刑されるという激動の人生を歩んだ秋水ですが、非常に母思いの人であったと言われています。文学館の常設展示には、秋水から母に宛てた手紙(※)が展示してあります。近況を語るその手紙からも母への思いが伝わってくるように感じます。



▲ 獄中で書かれた母宛秋水書簡
(※複製 原本は高知県立図書館蔵)

企画展年間案内

	企画展	その他の催し
4月	夏目漱石 -漱石山房の日々 4月8日(日)～5月20日(日)	●4.14(土)紙芝居定例会 ■4.21(土)朗読の集い ☆4.22(日)記念講演会
5月		◆4.28(土)文学カレッジ「漱石と楠緒子と孤蝶」 ●5.12(土)紙芝居定例会 ◆5.26(土)文学カレッジ「漱石と子規」
6月		●6.9(土)紙芝居定例会 ■6.16(土)朗読の会 ◆6.23(土)文学カレッジ「漱石・寅彦と科学」
7月	7月17日～22日 休館	●7.14(土)紙芝居定例会 ◆7.28(土)文学カレッジ「土佐日記について」
8月	和田悟写真展「赤毛のアン」プリンス・エドワード島への旅 7月28日(土)～9月2日(日)	●8.11(土)紙芝居定例会 ■8.18(土)朗読の会 ◆8.25(土)文学カレッジ「井伏鱒二」
9月	「寅彦が描いた花々」展 9月9日(日)～10月21日(日)	☆朗読コンクール(8月中旬地区審査予定) ●9.8(土)紙芝居定例会 ■9.15(土)朗読の会 ◆9.29(土)文学カレッジ「新美南吉童話の世界～母を恋ふる詩」
10月		●10.13(土)紙芝居定例会 ■10.20(土)朗読の会 ◆10月より3月まで専門講座開催予定
11月	清岡卓行展 11月2日(金)～12月19日(水)	●11.10(土)紙芝居定例会 ■11.17(土)朗読の会 ☆朗読コンクール(11.18(日)県審査予定)
12月		●12.8(土)紙芝居定例会 ■12.15(土)朗読の会
1月	「天璋院篤姫と宮尾文学」展 1月2日(水)～3月9日(日)	●1.12(土)紙芝居定例会 ■1.19(土)朗読の会
2月		●2.9(土)紙芝居定例会 ☆朗読フェスティバル(予定)
3月		●3.8(土)紙芝居定例会 ■3.15(土)朗読の会

「夏目漱石ー漱石山房の日々」展

平成19年4月8日(日)～5月20日(日)

場所：企画展示室　観覧料：550円(常設展含)

詳細は裏表紙をご覧ください。

和田悟写真展「赤毛のアン」プリンス・エドワード島への旅

平成19年7月28日(土)～9月2日(日)

場所：企画展示室　観覧料：350円(予定・常設展含)

世界中の人々に読み継がれている『赤毛のアン』。その舞台であり、作者モンゴメリが「世界で一番美しい島」と呼んだカナダのプリンス・エドワード島の自然とアンの世界を、アウトドア写真家和田悟さんによる『赤毛のアンのカントリーノート』と『「赤毛のアン」の島へ』収録写真からパネルで紹介します。

「寅彦が描いた花々」展

平成19年9月9日(日)～10月21日(日)

場所：企画展示室　観覧料：350円(予定・常設展含)

物理学者にして名随筆家である寺田寅彦(1878-1935)は、植物にも造詣が深く、自宅には四季折々の花が植えられていました。幼少年期の想い出を題材とした「花物語」など、寅彦の随筆には多くの花の名前が登場します。展覧会では、寅彦の随筆や絵画から寅彦の眼が捉えた花の姿をご紹介いたします。

▲葉けいとうとふよう

清岡卓行展

平成19年11月2日(金)～12月19日(水)

場所：企画展示室　観覧料：550円(予定・常設展含)

2006年5月3日に亡くなった、清岡卓行さんを偲んでの追悼展。1970年『アカシアの大連』で芥川賞受賞。日本芸術院会員。清岡さんは、鋭い感性と深い思索で、優れた小説、エッセイ、詩、評論などを残されました。本展では、ご遺族からお借りした資料を展示。資料を通して、清岡さんの人と文学を顕彰します。

▲アカシヤの大連
昭和45年3月講談社

「天璋院篤姫と宮尾文学」展

平成20年1月2日(水)～3月9日(日)

場所：企画展示室　観覧料：550円(予定・常設展含)

2008年、宮尾登美子さんの『天璋院篤姫』を原作としたNHKの大河ドラマが放映されます。これに合わせ、本年度、高知県立文学館は、かごしま近代文学館と共催で、「天璋院篤姫と宮尾文学」展を開催いたします。この作品は、57歳の時執筆された宮尾さん最初の歴史小説です。篤姫は、第13代将軍徳川家定の正室として、また、皇女和宮の姑として、家定亡き後の大奥を束ね、孫の家達を育て上げました。徳川家の人間として、その生涯を終えた篤姫の軌跡と宮尾文学の魅力をご紹介いたします。

▲天璋院篤姫
昭和59年9月講談社

文学館の常設展が変わります！

平成19年・夏、リニューアル予定！これまでになかったアプローチの仕方で、高知の文学をより分かりやすく紹介していきます。ご期待ください。

高知県立文学館ニュース　第三十六号　平成十九年四月一日発行　〒七八〇-〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八-八二二-〇二三一　FAX〇八八-八七一-七八五七

高知県立文学館　カレンダー 4月～5月

※７ページに年間企画展スケジュールがございます。

企画展案内

「夏目漱石 ―漱石山房の日々」展

平成19年4月8日(日)～5月20日(日)

（※会期中　休館日なし）

場所：文学館　２階企画展示室　　観覧料：550円（常設展含）

漱石が四十歳から晩年までを過ごし終の棲家となった自宅書斎〈漱石山房〉からは、数々の名作が生み出されました。〈漱石山房〉の日々は、文豪としての日々でもあったのです。残された遺品、原稿、書画、書簡などを中心に、漱石の色あせぬ魅力をお届けします。また、〈漱石山房〉に集った多くの文学者たちや、高知県出身の物理学者であり随筆家である寺田寅彦と漱石のつながりも紹介します。

関連企画

・記念講演会「夏目漱石―寺田寅彦・大塚楠緒子との交流を通して―」

元立教大学教授・石﨑等氏が漱石と寺田寅彦・大塚楠緒子との交流を中心に語ります。
日時：４月22日（日）14:00～15:30　　場所：高知県立文学館１F文学館ホール
定員：100名　　講師：石﨑等氏（元立教大学教授）
参加：当日観覧券が必要です（但し２割引）　※事前に電話で申込みが必要です
※記念講演会終了後には石﨑等氏による特別展示解説が行われます。

・朗読の集い「拝啓、漱石先生」

漱石の短編および寺田寅彦とのつながりが紹介できる作品を朗読します。
日時：４月21日（土）14:00～16:00　　場所：高知県立文学館１F文学館ホール
定員：60名　　朗読：高知県立文学館カルチャーサポーター
参加：無料　※当日開催時間にお越しください

観覧者限定関連企画

■参加には当日の「夏目漱石―漱石山房の日々」展観覧券が必要です。

・文庫本装丁講座「私だけの漱石」

漱石文庫本のカバーを作ってみませんか？お手持ちの漱石作品の文庫本をお持ちください。
開催日：４月15日（日）13：00～16：30　　場所：高知県立文学館１F文学館ホール
定員：20名　　対象：初心者　※事前に電話で申込みが必要です

・Ｍｙ原稿用紙を作ろう

展覧会をみている間にオリジナル原稿用紙ができあがります！便せんとしてもどうぞ。
開催日：４月30日（月）　受付時間 ①13:00 ②14:00 ③15：00
定員：当日受付時間毎に各回先着20名　　対象：どなたでも参加できます
時間：申込みから出来上がりまでに約１時間　※当日受付時間毎に先着順です

・文豪クイズ 漱石先生に挑戦！

ゴールデン・ウィークは文学館に！正解者には素敵な賞品があります！
開催日：５月３日（木）、４日（金）、５日（土）の３日間
対象：展覧会観覧のどなたでも参加できます　※当日いつでも参加できます

・ギャラリートーク（展示解説）

企画展担当者が分かりやすく展示の解説をいたします。
日時：４月29日（日）、５月６日（日）、13日（日）　各日とも13:30～14:00　※当日開催時間にお越しください

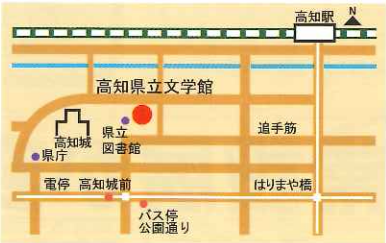
※休館日：7月17日～22日（メンテナンス休館）・年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。

利用案内　基本データ

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	なし
観覧料	一般350円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail：bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●JR高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩５分
●バス停公園通り下車北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857